

我が家の庭に70年くらいになると思われるホウの木がある。  
東北地方で好まれるホウ葉味噌のホウの木である。  
春の芽ざしから秋の落ち葉拾いまで、一年中を楽しませてくれる。  
特に花は香りがよく、実になって赤く色づいた時の鮮やかな赤の色は何とも言い難い。  
これからの落ち葉は一枚の葉が大きいので一枚、一枚手で拾って片づける。



(荒川副代表家のホウの木)

## ☆2019年度4月から9月の活動報告

\*HP 上に参加者の貴重なご感想を掲載しておりますので、終了後逐次ご覧ください。  
<http://www.nihonbunkajuku.org>

### 講演会：狂齋！暁齋！－河鍋暁齋のレトリック

4月20日(土) 13:30~15:30 @玉川区民会館  
日本大学企画広報部広報課 田淵 正和氏

年度初めの第56回講演会は、最近色々なところで関心を呼んでいる画家河鍋暁齋にスポットをあててみました。今号では、その報告を田淵講師ご自身の手で皆様にお伝えしたいと思います。

幕末から明治前期に活躍した日本画家河鍋暁齋は、最後の浮世絵師と呼ばれる。「画鬼」を自称し、仏画・美人画・戯画・狂画などジャンルを選ばず、リアルに描く絶妙な筆技で人々を驚嘆させ人気を博した。駿河台狩野洞白へ入門、免状を与えられ洞郁陳之の名を受けた狩野派絵師である。暁齋は、先に海外で作品が注目された画家であり、近年では、河鍋暁



齋記念美術館を設立運営している曾孫河鍋楠美氏、美術・美術史研究者、郷土史研究者、暁齋作品コレクター（国内外）、暁齋美術館主宰研究会会員の研究成果により、毎年多くの展覧会が開催されている。

そうした新発見の「事実」が展覧会図録・著書に反映されて、暁齋の経歴（年譜）が、だんだん詳しくなっているのだが、近世史を専門にしている私などからみると、より詳しくなっているはずの暁齋の解説におや？と思うことがあちこちにあるのだ。私は、美術・美術史が専門ではなく江戸幕府の旗本・御家人ら幕臣の研究が専門で、ここ数年輪王寺宮家来であった大沢家の資料（船橋市大澤庄一・恵美子氏所蔵）を調べている。大沢鎌蔵保邦（3代目）の娘近（ちか）が河鍋暁齋の後妻となっており、大沢を調べるために、暁齋側に資料はないかと暁齋についての著作物を見てみると、ちょっと変だぞ！と思うところから始まった訳で、この講演は、そうした疑問を具体的に検討したものである。

河鍋暁齋は、下総国古河石町（茨城県古河市）に、河鍋記右衛門の次男として生まれた。父は米穀商亀屋の次男で、古河藩士河鍋喜太夫信正の養嗣子となったが、藩に暇願いを出して認められ、江戸へ出て幕府の定火消同心甲斐氏の株を買ってあとを継ぎ、甲斐記右衛門と称した。母は浜田藩松平家の藩士三田某の娘。暁齋は幼名を周三郎といい、兄直次郎がいた。安政5年頃、神田鍛冶町の扇屋伊勢新の勧めで狂画を描きはじめ「惺々狂齋」と号した。慶応3年輪王寺宮家来大沢行衛の娘近（ちか）を後妻として娶る。明治3年、酔余の席画がもとで官憲の忌諱にふれての投獄を機に、暁齋と改名。明治14年第2回内国勸業博覧会に出品した「枯木寒鴉図」が、最高の妙技2等賞を受賞し、この絵に自ら金100円という破格の値を付け、一躍有名になった。

以上が、暁齋の一般的な経歴だが、暁齋の生涯を俯瞰してみるには、飯島半十郎（虚心）著『河鍋暁齋翁伝』が適当と思われ、諸書に解説される暁齋の事績はもっぱら本書がもとになっているようである。本書は、暁齋死後の明治27年に刊行されたものだが、著者の飯島虚心は暁齋の死後、当時存命する暁齋の知人や関係者を各地に訪ね歩き、さらに虚心自身が調べをして補足しており、暁齋の生涯についての情報が多く盛り込まれ、示唆的で貴重な伝記であるといえる。

本講演での重要なポイントとして、虚心は父飯嶋善蔵為章が小普請方改役から佐渡奉行支配組頭（300俵高・役金100両）に出世し、永々御目見以上の家格となった、れっきとした幕臣であった、即ち、幕府の仕組み・構造を身を以て体現しているということを指摘しておこう。虚心は、幕府の学問所昌平黌で教授の中村敬宇（正直。幕臣儒者）や成島柳北（幕臣奥儒者、維新後は言論界で活躍、朝野新聞社長）と知り合ったことで、明治維新後は編集者として活躍したが、50歳頃から浮世絵研究一筋となり、明治25年頃に「葛飾北斎」の伝記を書いたことが『河鍋暁齋翁伝』を編むきっかけとなったのだろう。

河鍋一家は、江戸へ出て定火消同心甲斐氏の株を買ってあとを継ぎ、本郷お茶の水の火消屋敷に住んだという。定火消は上級旗本の役職で、配下に与力（80俵高譜代席）・同心・臥煙（火消し人足）がある。同心は、30俵2人扶持高～15俵2人扶持という下級幕臣だが、本来禁止されている同心株は100両程の資金で取得できた。下級古河藩士であった河鍋が、どのようにして高額の金子を用意したのか疑問だ。



四目結



武田菱(割菱)

さて、歴史は科学であると言われるように、資料を根拠にして考察をするが、現在まで暁斎の生家や藩士河鍋家は関係資料に出てこない。

暁斎の父河鍋記右衛門は古河の米穀商亀屋の次男に生まれ、古河藩士河鍋喜太夫の養子になったという。商家から藩士の（つまり武家）に養子に入るのは、暁斎の親戚に藩士家と繋がりがあつたか、財政的理由（持参金）ということが考えられるが、後に古河藩を離脱して江戸で同心の株を買ったならば、生家亀屋が裕福であると考えるのが普通。ならば亀屋は、どの大名家も同様だが、慢性的財政難の古河藩へ献金などをし、見返りとして（藩から）名字帯刀や藩士待遇の地位を与えられるというケースはあちこちにみられる。こうしたことは、その地域の歴史的様相を物語る資料として確認することができるが、地元古河市の歴史編纂物『古河市史』資料近世編（藩政・町方・地方）などを見ても、亀屋や藩士河鍋の手掛かりがまったく出てこないのだ。

次に、暁斎の墓は谷中瑞輪寺にあるのだが、父親が跡を継いだ甲斐家の墓も一緒にある。この墓は大正4年に建立されたもので、飯島虚心は家紋を知る由もないはず。虚心は、『河鍋暁斎翁伝』で、「甲斐氏は蓋し甲州の士ならん。故あり、本姓を称せずして甲斐と称せしものか。記右衛門の墓石に武田菱の紋を刻みあるをもて考ふれば、或いは武田家に縁故あるものにや」と言っているが、この甲斐家の家紋は「菱」ではなく、「四ツ目結」である。また、甲斐氏＝甲州出身の武士というのは短絡的で、甲斐の苗字は九州地方菊池氏系統の苗字。甲斐・菱紋・武田と上手い連想ではある。また、幼少時の逸話の中にも、「供の男」や「下婢」（下女）といった表現で甲斐家の雇人が登場しているが、火消同心の河鍋家で、父・母・兄・暁斎の家族4人の他に、供の者（男）1人、下女1人がいたことになり、家禄30俵2人扶持の同心は、現在でいえば年収300万円ほどになり、下男・下女を雇えたのかはなはだ疑問である。

以上のように、史学の徒から見ると疑問があちこちにある河鍋暁斎の人物伝なのだ。今回の講演のタイトルの副題を「河鍋暁斎のレトリック」と付けた。レトリックとは、「言葉の上では事実と異なる（ように見える）ことを述べながら、実質は、事実をより鮮やかに、より分かりやすい形で引き立たせている。実は、それこそがレトリックの本質である。」と解説され、言葉を有効に使い、うまく美しく表現する修辞法だ。

飯島虚心が訪ね歩いて聞き取った暁斎の人物像というのは、生前の暁斎を知る人々が「暁斎が言っていたことだから」、ということにならないだろうか？

この講演では、暁斎の生誕から明治維新頃までが話の対象だったのですが、結局、数々の検討事項を残して時間終了となってしまいました。機会がありましたら、続きをお話したいと思います。



☆NPO 法人には、収入の20%を一般からのご寄付で賄うという規定があります。

日本文化塾は、より多くの皆様のお支えをお待ちしております。

お申し込み・お問い合わせは→ [secretary@nihonbunkajuku.org](mailto:secretary@nihonbunkajuku.org)

## 講演会：本居宣長「歌道」と「古道」

6月22日（土）14:00～16:00 @きゅりあん  
金子 元氏

本第57回講演会には事前申込みが殺到し、やむを得ず多くの方々にお断りのお返事を差し上げることとなってしまいました。たいへん申し訳なく、残念に存じます。当日のお話の内容については、次号紙面で金子講師ご自身によるご報告を掲載させていただきますので、しばらくお待ちください。

### 令和元年の夏に想う

真野 和子

5月の御世代わり以来、巷に飛び交う「令和初・・・」の響き、まさにその元年にあたる今年の夏ほど、蒸し暑さに翻弄され、気力体力の限界を感じながら過ごした夏は無かったように思う。例年のこの時期は日光で山歩きをしながら気分転換をし、秋へと切り替えるのを慣わしとしているが、今年は夏休み前に受けた人間ドックで夫婦共に再検査が必要との診断が下され、急遽、予定を中止する羽目となってしまった。この間、静かに過ごしていると、身の周りのさまざまな生態系の変化に気付くこともあり、物知り気分楽しさを覚えたのも事実であった。

夏は流星群の季節、三鷹天文台まで自転車で一走り、それも面倒なので、タブレットで星雲を見ることにしようと、冬のオリオンの三星の近くにある馬頭星雲を調べていたら「創造の柱」という三本の星雲が目にとまった。巨大な星雲の柱が三本屹立して見惚れるほど素晴らしい写真！魅力的なのに、少し不気味で恐ろしい。馬頭星雲なんて見つけた人は興奮したろうな！宇宙にチェスのコマがある！そんな想像が湧いたのも、この夏の収穫に数えられるのだろうか？

ストレス混じりの憂鬱な気持ちに包まれた8月初旬に福岡の友人から届いた嬉しいプレゼント！何と、枝からもぎたてホヤホヤの葡萄の新種、お手製の陶器に入ったブルーベリーのジャムに添えられたカードに心なむ思いに包まれた。彼女はご主人の赴任に伴い、22年間を英国で過ごし、帰国後は郷里の福岡で晩年を過ごすことを選択した。小柄ながら、稀にみる働きものの女性で、その広大な敷地に無農薬の果物や野菜を育てては、夕方収穫したばかりの新鮮な作品を自慢がてらに翌朝届きの宅急便で送るのを趣味としているらしい。英国でもロンドン郊外にアロットメントを借りては無農薬の野菜を手土産に私のフラットにも遊びに来ていた。丸ごと茹でたキャベツを切った中から青虫が出て騒いだ記憶が残っている。最近では、敷地内にある浜までドラム缶2個を小型ミゼットに積んで塩汲みに行き、塩田に撒いて、塩作りまでするという魅せられる魂の持ち主である。出来立てのお手製の塩が今年も届いていた。彼女がライフワークとして取り組んでいるのが環境問題で、自然環境を意識しつつ日常を過ごすことの大切さを訴えながら地球温暖化対策チームの活動に加わっている。何年前かに衝撃を受けた映画「不都合な真実」の中の南極とグリーンランド氷床の融解の映像を甦らせながら、この夏日本各地で頻発した災害も温暖化がもたらしたものと思えば、自分に出来ることから取り組む事が大事だと痛感した夏でもあった。

---

## 逍遙 (12)

### 池上線に揺られながら

長谷川 修

筆者は 20 年程前から大田区の池上に居を構え東急池上線の沿線に住んでいる。池上線は、五反田・蒲田間と距離が短く相互乗り入れもないことから知名度が低い。

池上線との初めての出会いは大学時代にバイト先が沿線にあった頃で、今から 60 年近く前になる。当時の電車は木製か東横線の使い回しで 3 両編成だった。同じ頃東急系列では池上線のほか旧目蒲線（目黒・蒲田間）と大井町線（大井町・溝の口間）があったが、3 線ともに古い車両が 3 両で、路線距離は 11～13 km、駅の数も 15～17 と、よく似た三つ子の兄弟路線だった。それから半世紀、まず大井町線が変わった。1966 年より逐次溝の口から西に西にと延びる田園都市線と接続し、現在の大井町線は急行 7 両、普通 5 両だ。また旧目蒲線は 2000 年に分割され、蒲田・多摩川間は多摩川線、多摩川・目黒間は目黒線となった。多摩川線は枝線となり昔どおりだが、目黒線は、南は日吉まで延び、北は目黒から先を地下鉄南北線との相互乗り入れで都心を縦断し、急行、普通ともに 6 両編成だ。三つ子の兄弟のうち二人は大きく変貌したが変わらないのが池上線で、車両こそ立派になったものの相変わらずの 3 両編成で急行もない。

76 年に発売されヒットした曲に西島三重子の「池上線」がある。フォークにしては演歌っぽく歌詞に「古い電車のドアのそば」「すきま風に震えて」とあり、当時新人歌手の西島は東急に共同プロモートを申し入れたが、東急側は池上線のイメージを悪くすると断った。近頃の東急は池上線の知名度を高めることに力を入れており、2007 年の開業 80 周年には特別電車「名曲池上線号」に西島を迎え車内コンサートを開き、開業 90 周年には観光名所ならぬ生活名所池上線を掲げ一日無料乗車券を配った。

筆者は無名でも良い、昭和レトロの香りを残し、どこかから「池上線」のメロディが聞こえてくるような池上線を愛しく思う。



東急池上線

---

☆新入会員募集中です。お友達をお誘いください。



## 理事会だより

☆今年が発足から10年となり、会報も20号を数えることとなりました。  
思えばこの10年間は、充実した時間が飛ぶように過ぎた感があります。これも、すべて、お支えくださる会員、賛助会員とイベント参加者、とくにご熱心なリピーターの皆様方のお陰と、心から感謝いたします。今後も、微力を尽くして参りますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

☆今年度のスタッフは以下の通りです。

代表理事（主宰）：鈴木 壽子

副代表理事（経理担当）：荒川 順子

理事（広報担当）：須澤 晃（関西在住）

理事（総務担当）：真野 和子

監事：横山 善宏（山梨在住）

事務局：由良真理子 会報：大江洋代、山嶌加代子（ボランティア）

☆理事会メンバーも、半数は後期高齢者に近づきつつあるのが現実です。  
お手伝いくださる方、来年度は理事を引き受けてやろうとおっしゃる方どうぞ、お手をおあげください。首を長くしてお待ちしております。

☆発足以来の会員で、記念すべき最初の講演会（兼演武）講師の大久保律雄さん。  
このほど、ご自身の師範と共著で、『新撰組の剣 天然理心流』（2019年10月、ぶんしん出版）という本を出されました。全く知られていなかった新撰組活動当時の剣の実際の技を、古文書によって研究復元された「天然理心流・剣法名談録と佐藤家」の章を含む天然理心流のすべてを網羅する素晴らしい一冊です。大久保会員と荒川治師範との立ち会いの分解写真は、ページを開くだけで息づかいまで読み取れるほど。張り詰めた空気（殺気？）が伝わってくるようで、身が引きしまります。通販でも手に入るとのことです。是非とも、お手にとってご一読ください。



## お詫びとお知らせ

6月の講演会の折、本年11月本塾主催『滋賀ツアー』のお知らせをいたしました。企画はすでに実行を待つばかりとなっておりましたが、この度、担当者の拠り所ない事情により、延期せざるを得ない事態になりました。楽しみになさっていた方々もいらっしゃることと存じます。たいへん申し訳ございません。深く深く、お詫びを申し上げます。

なお、ツアーは、来年度に延期いたしまして、桜が散る頃、皆様にお目にかかれまことを願っております。改めてお知らせ申し上げますので、何卒お待ちくださいますよう、理事一同、心よりお願い申し上げます。



## 身近な歴史 個人の歴史 お家の資料



### 近世日光と申橋家の謎（三）

#### 申橋家関係文書を読む

\* 無断転載を禁じます

#### IV 輪王寺宮家家臣から東照宮社家へ

申橋信政の語るところによれば、彼は日光の生まれで、慶長18年、天海に従って小山から日光に移り住んだ猿橋家初代（天海によって改姓する前は鈴木氏）右京道秀から数えて四世代目にあたる。右京道秀には三人の子があったが、長男道舜には嗣子がなかったので、養子縁組みをし、それが九兵衛将秀である。将秀は道舜の養子となる前は宮の側に仕える篠原又右衛門の次男であった。さて、信政が四世代目と書いてしまったが、宮家家臣の家を継いではいない、少々事情は複雑で、彼は養子将秀の子なのである。すなわち、右京道秀第二子（女）<sup>むすめ</sup>は日光御殿番野沢彦兵衛に嫁いでいたのだが、九兵衛将秀はその同じ野沢彦兵衛の先妻の娘を後妻に迎えていて、そこに信政が生まれていた。道舜の養子となる前の子であるかもしれないし、遅く出来た子であるかもしれない。つまり、右京道秀→道舜→将秀→信政というわけだが、申橋右京家を継いではいない。父の死後は幼少のため、実母の先夫の家中丸家の世話になっていたようである。

「<sup>それがし</sup>某 信政ハ父カ没後同九年（マヽ）中麿主殿楽職ヅ拜任ス、且幼少故楽職仲ヶ間ノ助勤ニ預ル、守澄親王江召出サレテ御側ニ奉仕シ、続テ一品天真親王江奉仕ス」

（その後、幼少期は実母の先夫中丸主殿の楽人となり、養父同様宮（守澄親王・一品天真親王）の側に仕えていた。）

しかし、そこへ勃発したのが、先号で紹介した天和二年の社家六人の追放事件であった。宮は、新しい社家を自らの信頼できる家臣のうちから任命すべく動いた。以下は先号にも紹介した史料だが、当事者の記述故、経過が明らかに分かるものである。

「天和二年当山古来の社家六人ノ内故有テ放職ノ時、御本坊御家臣ノ中ヨリ社家ニ補セラルヘキノ旨、公儀江達シ玉フトコロ、同四月十二日御門主思召ノ通りタルヘキ由、寺社奉行ヨリ執当観理院意円円覚院亮雄ニ命ヅ伝ラル、是因テ社職拜任、今度日光江供奉スヘキノ旨両執当申シ渡サル、是因テ社職拜任、（中

略) 同十三日ヨリ潔斎シ日光江供奉、同十六日例幣使等ノ社役ヲ勤メ、同十七日 御祭礼供奉、(後略)」 (「社家猿橋齋宮先祖伝記」申橋家所蔵文書)

幕府の許可を得た翌日、信政はさっそく身を浄め、日光東照宮に供奉することとなる。しかも、すぐに祭礼の大役を務めるのである。社家なら、あるいは神馬に乗ることもあろうが、馬術はともかく神道の教えやその他のお務めもどのようにして身につけたのか、等興味は尽きない。

信政は、もともと社家であった異父兄弟中丸(麿)勝興の子を嗣子猿橋大炊信門とする。中丸家も、以後新たな社家六家の一角をなしていく。

さて、第一回で、猿橋(申橋)家が二家あった?と疑問を投げかけたが、この謎は解決した。今で言うなら、分家を建てて社家に取り立てたかたち、ということになる。以上からはまた、東叡山と日光における寺、社家、楽人、宮家家臣相互の近さも十分に納得がいくのではないだろうか。今回は、宮家家臣申橋家を概観する。(虎)

---

## ☆後期活動予定

令和2年2月 企業博物館見学(詳細未定) **どうぞご期待ください!**

---



## 編集後記

第20号、本来なら特集を組んでもよかったのですが、あえて、いつも通りの会報としました。今後も変わらぬゆっくりした歩みを続けていこうと思います。

長谷川会員の「逍遙」。変わらぬ名文で池上線の楽しさを伝えていただきました。いつもは、あまり皆様の前に姿を現さない荒川順子副代表と真野和子理事にも、今号では巻頭言と随想にご登場願いました。

なお、第1号からの会報は、ホームページ上でお読みいただけます。秋の夜長、この10年の活動を振り返っていただければ幸いです。(虎)

